寒地及び高冷地

牧草（採草地）

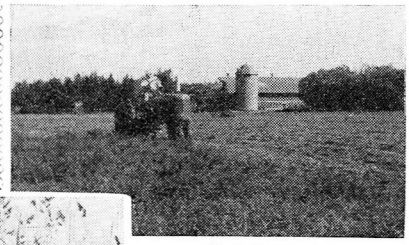
一 生産力の高い牧草地をつくるためには

(1) 地ごしらえとして、堆肥、石灰と熔性りん肥を耕起時に施用。

(2) 基肥と追肥はタップリと、牧草づくりに肥料のやり過ぎはありまん。窒素、りん酸、そして加里を充分にやります。

(3) 雑草や、病害にも注意、除草剤や、抜取り、保護作物（えん麦やイタリアン混播）で雑草を防ぎ、耐病性品種を利用して病害を少なくしましょう。

(3) 刈取りは遅れないようにまた低刈りは厳禁



牧草刈取風景
3—4回刈で10トン草地

まめ科といね科の混播が草地作の原則。赤クロバー、オーチャード、チモシーを主体に、更に2—3種加えます

まめ科牧草で最多収の

グリーンスィート

二年生のスィートクロバーは生育旺盛で二㍍以上にも伸びます。そして家畜が好食する苦みの少ないものに改良したのがグリーンスィートです。試作袋発売

二 混播の組合せも多収のために大切なこと

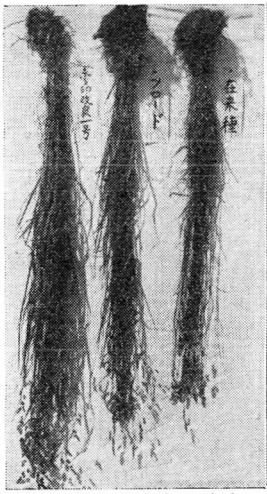
寒地及び高冷地では

赤クロバー
チモシー
オーチャード

が基幹草種で、これに冷湿地では、アルサイク、メドウフェスクが加わり、乾燥地では、ブロームグラス、ルーサンが加わって一層多収となります。

赤クロバーの代表品種
左から中生のハミドリ、晩生のマンモス、早生のメジウム、在来種

葉が多く遅刈用にも利用出来る
チモシー、クライマックス



オーチャード晩生の改良種、中生のフロード、早生の在来種

塩害につよいソルゴー 昨年秋道南の海岸地帯は塩風でデントコーンの葉が枯れ実入りが不良でしたが、ソバに作っていたソルゴーはおそく迄青々で、大変栄養価の高いサイレージが出来たという便りを随分頂戴しました。

良質乾草やサイレージを調製するためには

牧草収穫適期の幅を広げることが大切

乳牛の多頭化が進む程、飼料の省力栽培のために牧草への依存度が高まりますが、充分な機械力もなく、天候不順を考えますと、収穫適期が一時に集中することをさけなければなりません。これを考えた混播は品種の早晩性を利用した組合せが大切です。

◎早刈用混播例（札幌附近では五月下旬—六月上旬）

赤クロバー（ペネスコット、在来種）　一・〇キロ
ラデノクロバー　〇・一
オーチャード（在来種）　一・〇
メドウフェスク　〇・五
ペレニアルライグラス（在来種）　〇・五
ルーサン　〇・三

◎中期刈取用混播例（札幌附近で六月上、中旬）

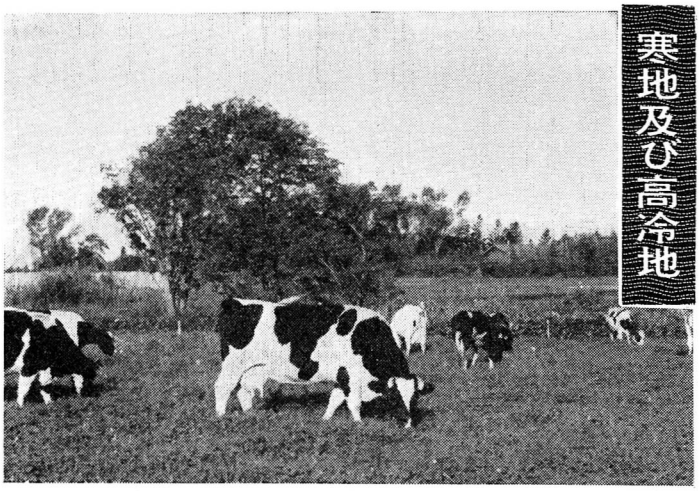
赤クロバー（ハミドリ、ケンランド）　一・〇
オーチャード（フロード、雪印改良種）　一・〇
チモシー（在来種）　〇・五
ペレニアルライグラス（マンモス）　〇・五
アルサイククロバー（在来種）　〇・三

◎晩期刈取用混播例（札幌附近で六月中、下旬）

赤クロバー（マンモス、アルタースェーデ）　一・〇
チモシー（クライマックス、雪印改良種）　一・〇〜一・〇
アルサイククロバー（四倍体）　〇・五
（場合によってはレッドトップ　〇・五）

そしてこれらの新播に当っては雑草害を少なくし、初年目の収量を挙げるために、イタリアンライグラス　〇・五〜一・〇キロ、クリムソンクロバー又はバーシームを一・〇キロを保護作物として混播、イタリアンの出穂直前に刈取りを行ないますと、早くから収かくが挙がり、雑草も少なくよい草地が造成されます。

寒地及び高冷地



まめ科といね科が一定割合いに保持されている良好な放牧地

牧草（放繋牧地）

一　よい放繋牧地をつくって夏乳で儲けましょう

乳牛の踏みつけと、頻繁な採食に耐えて、早春から晩秋まで長期間利用出来。しかもまめ科といね科の割合を一定に保って、安心して利用できる良好な放繋牧地を持つためには先ず混播草種の選定がスタートです。

ラディノクロバー　〇・五キロ
ニュージランドホワイト　〇・三
オーチャード　一・〇
チモシー（特に寒冷地）　〇・五
メドウフェスク　一・〇

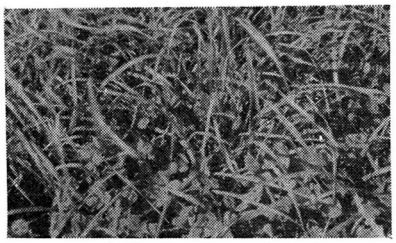
の混播はどこでも成功します。

二　まめ科、いね科率を一定に保持するためには加里分を絶えず補給することが必要です

その割り合いはまめ科六にいね科四程度が理想。

三　放繋牧地の簡易更新

放繋牧地は採草地に較べて収量の少ないのは土壌が硬化し、有機質が少なく、土壌水分の少ないことが原因しております。したがってこれを改善しますと収量もグントあがります。



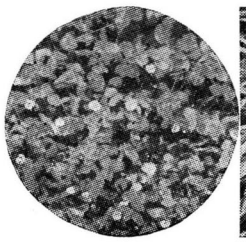
理想的な放繋牧用の混播草地

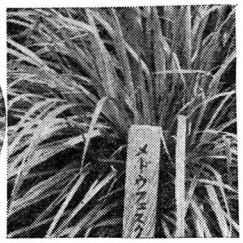
古い放繋牧地は晩秋に完熟堆肥と石灰を散布して、早春に、化学肥料（特にりん酸を多目に）を施して、デスクハローを縦横にかけ、表土を五〜六糎起すように簡易耕起を行ないそれに追播を行ないますと、簡単で見違える程の立派な草地に更新されます。

追播草種は

まめ科の多い処には
- イタリアンライ　〇・五キロ
- オーチャード　一・〇
- メドウフェスク　〇・五

いね科の多い処には
- ラディノクロバー　〇・三
- ニュージランドホワイト　〇・二
- メドウフェスク　一・〇





まめ科いね科率を程よく保つために使いたい
（左）円内　ニュージランドホワトイ　（右）メドウフェスク

凍寒害草地の対策には早春に追肥追播

道東、道北特に太平洋岸の寡雪、寒冷地帯では毎年発生する「牧草地の凍寒害」は冷害の減収と異って、牧草枯死で全く収穫が見られず、被害は極めて大きいのですが、毎年のことだけにそれがこの地帯で、アタリ前とあきらめておりますが、草種の選定、管理、利用方法さえ適切であれば防止でき、更に被害草地も簡易に更新ができて、多収することもできます。

一　草種は耐寒性の強い根の多いものを

チモシー、メドウフェスク、赤クロバー、白クロバー等を主体に、更に有機質の多い土壌では凍寒害が少ないので堆肥を入れ、根群の多いライグラスを混播して有機質の補給につとめると共に密播をしますと凍害が軽減されます。

二　管理は肥料を充分にやり、秋おそく刈取りや放牧をやめて、少なくとも二〇〜三〇糎の草で越冬させます。

三　被害草地は早春に追播を

土壌凍結が表層一五糎くらいとけた早い時期に草地全面に施肥を行ない、古い草地では石灰も入れ、デスクハローで簡易耕起を行ない

凍寒害地用追播用詰合せ種子

（下図）を追まきしますと播種後約三ヵ月で美事な草地に若返ります。

（作業詳細の説明書同封してあります。）

合計二キロ詰で特価八〇〇円（送料含み）

便利な追播用詰合せ種子
1袋で10〜20㌃播種で凍寒害草地や荒廃草地が美事に若返ります